

## 男女同権論と女権小説

塚 越 和 夫

明治十年代後半から二十年前半にかけて、婦人参政の問題から、女性の教育向上、男女交際論に至るまで、いわゆる女権論議が盛んだったことは、今日、周知の事実である。同時代の著名な文学作品を例にとっても、『浮雲』の第二回には、文三がお勢に「日本婦人の有様、束髪の利害、さては男女交際の得失などを論ずる」場面が設定されており、われわれは、同論議盛行の一端を容易に知ることができる。あるいは、それから十数年の歳月を隔てて刊行された荷風の『地獄の花』にも、ヒロインの園子が「一時は頻りに女権拡張なぞ云ふ事に付いて、友人の間を喋々して歩いた事もある。」という記述が見られる。荷風の場合は、硯友社の系統をひいた反政治からの発言であったのだが、とにかくこの問題が、少くとも風俗的には長く人々の心をとらえていた例証にはなるであろう。思いつくままに例を挙げただけなのだが、こまかく詮索するならば、荷風程度にこの問題に触れた作品は、おそらく枚挙にいとまがないにちがいない。

その、真剣な、時にはうわついた論議のやりとりを背景に、明治二十年前後に、政治小説としては鬼子とでも称すべき女権小説が

かなり多量に発表されたはずなのだ。「はずなのだ」と記したのは、もちろん、私にはまだ、その全貌がつかめていないためである。現在の私にできることは、お話にならない乏しい資料をもとに、その全体像をおぼろげに推測することだけである。にもかかわらず、私があえて拙文を草したのは、さまざまな被差別問題が鋭く提起されている今日において、ごく間接的に、いくらかでも問題を前進させる方向に寄与できたらという、ささやかな願いからである。

### 一

すでに、さまざまな書物で触れられ、常識化していることではあるが、明治二十年前後のいわゆる女権小説発生に至るまでの敘述の都合上、男女異権論までを含めて女権論議のごく概略をリスト・アップすると――

明治維新に際し、維新の志士たちに混って女性の活躍が目立つたことと、維新後の四民平等の考え方の影響から、男女問題論議の盛んになる下地は早くからあったが、意識的に論が高まった第

一の山場は、明治七、八年頃である。

まず、『明六雜誌』関係では、

森 有礼 「妻妾論」八号（七年五月）二七号（八年二月）

五回分載。

福沢諭吉 「男女同数論」三二号（八・三）

加藤弘之 「夫婦同権の流弊論」三二号（八・三）

津田真道 「夫婦同権論」三五号（八・五）

同右 「廃娼論」四二号（八・一〇）

等が目につく。また、『共存雜誌』では、

馬場辰猪 「本邦女子ノ有様」五号（八・四）

等がある。いずれも今日から見れば、論旨はきわめて素朴である。

次の山場は、明治十一、二年である。おそらく、九、十年は、神風連の変、西南戦争等があり、政情不安で、男女問題論議どころではなかったであろう。もっとも皆無なわけではなかった。流れは絶えなかったもので、いわば下火になった状態だったのである。

「妻妾論」（大阪日報・一一・四）

犬養木堂 「女子の地位」（郵便報知・一二・二）

アモス・鈴木義宗訳 「婦女法律論」（一一）

ミル・深間内基訳 「男女同権論」（一一）

これらのうち、とくにミルの『女性の隷従』の第一・二章の訳である『男女同権論』は、日本の婦人解放運動を飛躍的に発展させる基礎となった記念碑的な一本であるといえよう。のみならず、

同原書は、のちのちまで、日本のみならず、広く世界の婦人参政運動に多大な影響を与えた古典として忘れえぬものである。一八六九年に刊行された同書は、ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』（一七九二）のみごとな主張に、七八十年ののち、世界的に社会的な支持を与えたものである。とするなら、たとえ流行にのつたにせよ、ミルの著書の刊行後、わずか十年で、日本において同書が訳出された功績の大きさをわれわれは、長く記憶にとどめておかねばならぬ。

しかし、これらの論文や訳書は、いずれも男性の手になったものであった。もっとも、世界の婦人解放運動は、当初、すべて男性によって開始されているのだから、後進国日本においてそうだったことは、あながち恥辱とするに足らぬことかもしれない。ところが、高知を中心に自由民権の運動が高まるとともに、その方面での女流運動家が登場することになる。たとえば、民権婆さんと呼ばれて有名だった楠瀬喜多（一八三四—一九二〇）のような女性が演壇に立つて活躍した。彼女は、河野広中や頭山滿とも親しく、頭山の回想によれば、時の高知県知事渡辺国武（のちの蔵相）を男女同権論でやりこめたこともあるという。剣術、薙刀を使い、鎖鎌の達人だった由。女権運動の大先輩であり、一個の女傑であった。その後、清水とよ子等の運動家も出たが、明治十五年から十七年へかけて、もっとも活躍が目立ったのは、よく知られているように、岸田トシ（自由党副総理で、のちの初代衆議院議長、男爵、中島信行に後妻として嫁した中島湘煙女史。信行の先妻は、陸奥宗光の妹だった。）である。明治十五年四月一日、日

本立憲党主催の臨時政談演説討論会で処女演説をした彼女は、同年四月七日、二十一日、二十九日、五月十三日、十四日と、たて続けに演壇に立ち、ことに五月十四日の「岡山県女子に告ぐ」では、かの景山英を発奮させたことで著名である。若くて美人の演説家ということで、たいへんな人気を集め、当代の新聞を賑わした。ただし、むろん、彼女の演説の内容は、今日では知る由もない。が、ここに明治十五年十月出版の『自由改進 明治演説評判記 全』（栗田信太郎編著）というパンフレット（五十三頁）があり、そこには、田口卯吉、福地源一郎、福沢諭吉、中島信行、馬場辰猪、犬養毅、島田三郎、矢野文雄、小野梓、尾崎行雄、河野広中、植木枝盛等々、そうそうたるメンバー五十人の演説の評判記が掲載されている。その中に混って紅一点、岸田俊女の名が見える。

それによれば、「評判ニ曰ク女子ニシテ豪傑ハ英國ノイリサベス女王我國ノ神功皇后ナリ女弁士ニシテ名アルモノハ岸田俊女ヲ舍テ他ニナキナリ此女子ノ演説ヲ聴クモノハ皆感服セザルナシト然レドモ此女子ニモ亦癖ナキ能ハズ癖トハ立居振り舞ヒ言語ノ放チ方ハ女子ニ不似合恰カモ男子ノ為スベキ処ナリト（女子ナラバ女子相応ノヲ為スベシ）是レ則チ此俊女子ノ欠点ト謂フベシ」とある。この評判記そのものが演説の実質よりは形式を表面的にとらえたものに過ぎないから、別に貴重な文献というほどのものではないが、当時の岸田の演説の調子をうかがうには足りよう。しかし、いったい、「女子相応」の政談演説の仕方などというものがあろうのだろうか？ 彼女は、かかる謬見とも戦わねばならなかったのだ。

前述の如く、彼女の演説の内容は知る由もないが、その時代の主張そのものは、『自由燈』に掲げた論文から推察できる。一例として、有名な「同胞姉妹に告ぐ」（一七・五・一六）の一節を記しておく。

妾、今試みに世の自由を愛し、民権を重んずる諸君に問ふ、君等は、社会の改良を欲し玉へり。人間の進歩を欲し玉へり。人間の進歩を謀り玉へり。而して何とてこの男女同権の説のみに至りては、守旧頑固の党に結合なし玉ふぞ。嗚呼世の男子らよ。汝等は口を開きぬれば、改進と云ひ、改革と云ふにあらすや。何とて独りこの同権の一点においては、旧慣を慕ひぬるや。俗流のまゝに従ひぬるや。我が親しく愛しき姉よ妹よ。旧弊を改め、習慣を破りて、彼の心なき男らの迷ひを打破り玉へや。

右の如く、きわめて勇ましい論調で、「恰カモ男子ノ為スベキ処ナリ」と評された岸田の演説の模様を髣髴させるものがあろう。ことに、「君等」から「汝等」に男の地位が下落しているあたり、岸田の昂揚した感情がありありと伝わってくるのである。

けれども、明治の日本は、岸田の主張どおりには進まなかった。すでに政府の巧妙な弾圧により、自由党は解党し、自由民権運動は退潮していた。ただ、この時期に、女権論議だけは生き残り、ジャーナリズムを相変らず賑わしていたのである。けだし、国会開設は約束されたものの、婦人参政権は歯牙にもかけられなかったため、逆に反体制運動がここに活路を見出したのだと考えられなくもない。たとえば、明治十八年四月十八日の『改進新聞』

には、「女子選挙権 宮城県で実行」の旨の記事が見られる。ただし、仙台区内における各町の組長選挙の場合にすぎないが。また、「女権拡張」仏国には独身者が殖える」といった反動的な記事も十八年十二月三日の『朝野新聞』に出ている。第三の山場ともいえる、そして、おそらく最大の山場であったこの時期における女権論議には、次のようなものがある。

後藤 房 「男女異権論」(明一八)

福沢諭吉 「日本婦人論」(明一八)

田口卯吉 「日本の意匠及情交」(明一九)

福沢諭吉 「男女交際論」(明一九)

横山雅男 「婚姻論」(明二〇)

これらのうちでは、福沢の論文が現在でも読むに堪える堂々たるものである。後藤房の論文は、女性の手になる異権論として注目されているが、あるいは男性の変名ではないかとの疑いもある。また、この期においては、『女学雑誌』が女権論議の主要な舞台となった。前述の岸田もしきりに論文を寄せているが、今は紙数の関係で触れないでおく。その他の主要な論文を略記すると、同権賛成論には、

イーストレーキ 「女流の戦争」(四二―三三号)

同右 「唯女子なり」(四四号)

等があり、反対論には、

ベルギー新聞抄訳 「婦人をして政務に参与せしむべからざる説」(四三三号)

独乙某博士 「日本の婦人論」(四四号)

等がある。「ベルギー新聞抄訳」とか「独乙某博士」とかは、いかにもうさんくさい。当時は、自説を権威づけるために西洋人の名を使う場合があったから。あるいは日本人の書いたものかもしれない。それに、時期尚早論としては、おそらく巖本善治の筆になると推察される

「婦人の参政及高等教育」(四三三号)

がある。婦人解放運動の問題点は、「性」の差異が「性」の差別につながっているという、ただこの一点にある。したがって、たとえ男女間に何らかのかたちで能力の差があったとしても、同等の権利を享有できねばならぬという点が争点になるべきはずであった。けれども当代においては、男女が同権であるためには、その前提として能力が同じでなければならぬという点に論点がしばられてしまった。そこで同権論者は、なんとかして男女間に能力差のないことを証明しようとし、神功皇后、北条政子、春日局等の女傑の名を持ち出した。啓蒙的な意味合いもあったのだろうが、これらの登場人物に時代相もうかがえて興味深い。一方、異権論者は、男女間の体格の大小から脳の大小に論点を移し、能力差を裏証しようとする滑稽を生じた。それにキリスト教の教化主義の影響が加わり、男女同権のためには、まず、女子の教養を高めねばならぬという、一見、内面的には向上した、当代にあつては無理からぬ主張が生じたのである。すなわち、政治的には、女権から女学へと後退したかたちにこの問題は変質して行くのである。そこから明治三十三年三月、治安警察法が公布され、女子が政談集会に合合し、また発起人になること、女子が政

治結社に加入することを禁止されるに至るまでの距離は、きわめて短かったといわねばなるまい。以後、婦人解放運動は、同法廃止という、明治十年代よりも後退したかたちで戦われなければならなかった。

## 二

以上のような女権論の流行を背景に、いわゆる女権小説が制作されるわけである。だが、単に政治的的目的のために、女性が男性を助けて活躍するというのは、当時の政治小説のおきまりのパターンであるから、著名な作品（たとえば、『経国美談』『佳人之奇遇』『雪中梅』『花間鶯』『自由艶舌女文章』等々）の多くは、この範疇から除外しなければならぬ。また、小説という観点からすれば、史伝実録に近いもの（たとえば、逍遙の『朗蘭夫人伝』や独善狂夫の『自由之犧牲 景山英女之伝』など）や、翻訳、翻案の類たとえば服部撫松の『進歩第二十二世紀』も除く必要があらう、こうした作業を続けると、もろもろの全集などに復刻され、人口に膾炙された作品のほとんどは消去され、比較的無名な作品群が残ることになる。これらの作品の著者は、自由党系、改進黨系と、党派別による分類が可能である。けれども女権論議に関する限り、前記岸田の言のとおり、各党々員の多くは、「旧慣を慕ひ」、「俗流のまゝに従ふ」状況で、必ずしも自由党員だった者が同権賛成論者とは限らず、分類そのものがナンセンスなので、行わない。あくまで作品の内容に即して分類してみよう。

一、自由民権の理を説きながら、部分的に男女同権論を記した

作品。

a、東洋奇人高安亀次郎著『政海情波寝やの月』（明二〇・一一）本書の「自跋」には、

秋雨愀々として頻りに書窓を撲つ余机に倚るも唯其慘憺たる声を聞くのみにして亦無聊に堪へず会々「ビーコンスフルド」伯か著はせし所の「エンジミオン」を繕ぎ之を一読して「モントフホット」夫人の快活能く一大仮戦場を開き遂に世目を驚かしたるの段に至り悄然嘆して曰く嗟乎東洋亦此快活なるの一夫人なきか会々婦女子の朝は毅然として婦女子か氣風の振起せざるべからざるを痛嘆するも夕は舞踏場に出て、万燈の下男子と痴談をなすに過ぎず廉耻地を払ひ貞操天に消ゆ嗟乎東洋亦此快活なる一夫人なきかと遂に鈍筆を煩はすに至る況んや「ビーコンスフルド」伯か少年の挙動実に余をして欽羨興起せしむる者あるに於てをや若し夫れ脚色の好悪文章の暢否に至りては之を読者の意に放任せんのみ（旧漢字を新漢字に、変態仮名を普通の仮名に改めた。以下同。）

とある。本編の荒筋は、改進黨保守中立三党の連合内閣において、保守党党首で外務大臣の大矢国麿が倒閣をたくらむが、改進黨党首で総理大臣武田義猪の妻芳子が夫を助け活躍するというものである。ただ、「自跋」に明らかなように、著者は、意識的に「東洋」の「快活なるの一夫人」を描き出そうとしている点に女権小説としての特色が認められる。けれども、本書、天外居士の「序」に、「女権ハ擴張せざる可らざるなりとは。誰人も唱道する所なるか。然し今日の所で女権を擴張するには。第一準備として

先づ女子の気風と。高尚を優美に赴かしむる事必要なり」云々とあるように、むしろ女学に後退した地点で制作された作品と見ることが出来る。

同じことは、前掲書に序文を記した

西村天外道人（富次郎）著『美人の艶説』（明二三・六）

にもいえる。同書のヒロイン照田節は、女子師範校に入り、学業を修めた才媛なのであるが、「今の婦女子等が女権を張るとして女にも似合ぬ生意気の風あるは憂慮すべし」と考え、「勉めて活潑なる気概を養ふて着実なる進路を歩」もうとしている女性だ。この作品の山場は、彼女が鵜遊館において演説する場面だが、その中で、「是迄我邦にては男権のみ強く婦人と申せば柔弱なもの」といし何事にも厭を容るゝことを禁じて居りました」といいながらも、結局、その立場は、「何をか婦人が国会に向て尽すの義務と云ひば我が良人の社会に尽すべき義務を助けて共に我が執る所の主義を貫く事に奔走もし刻苦もするが即ち是れ今日の婦人の尽すべき義務かと思ひます」というところにある。女学思想の行きつく地点は、とどのつまり、このように内助の功に落ちつくことになるのだ。良妻賢母教育と多少の教養主義とがミックスされたものに過ぎまい。

以上が部分的に消極的な女権思想、否、女学思想を鼓吹した作品の例であるが、これに対して、同じく部分的ながら、積極的な女権論を展開している作品の例を、二、挙げてみよう。

b、西村天四居士（時彦）著『居酒屋の娘』（明二二・一二）  
ここでは、居酒屋の娘（文中には、「女子且賤業者」と記されて

いる）小竹が、新聞で学生が捕縛された記事を読み、悲憤慷慨する一節のみを引用しておく。

……マアどふして日本の男児は睡たよふな人ばかりだらふ踏付にばかりされていなくてどし／＼やつて見ればいゝのにソレはそふと関さんへ探偵中だとの事だが若し国事犯で捕縛にでも逢ひなされへしまいかと案じて見て仕方のない身の上たとへ東洋の何のと笑れても心に評した上からは身は賤しくとも此の儘にムムム一ツ演説でもして世間の男をあはつて見よふかそふすれば関さんの気象に感動して奮発する人があるかもしれん出過者ムムム生意気ものと云れたつてかまふものか。

西村氏には『屑屋之籠』（明二〇）の如き作品もあり、下情には通じていたらしいが、a群に属する作品の登場人物が上流階級もしくは教養ある女性であるがゆえに女学に走ったのに対し、この作品の女性が下層階級であるがゆえに激越な調子で語るその対比には興味を惹かれるのである。むしろ、この女性に社会主義文学の源流を見ような乱暴なことはできないが、たてまえては、この種の女性が目覚めることに女性解放運動の原点は存するはずなのである。同書は、ごく部分的に下積みの女性が奮奮するというストーリーだが、全体を通じ、一人の女性がいろいろ苦勞をしたあげく、女権の意識に目覚めて行く過程を描いたものには服部撫松著『文明春告鳥全』（二〇・三）

がある。彼には、前述のとおり、『世界第二十世紀』の如き訳書もあることなので、この著作のあることは、むしろ当然だといえよ

う。なお、服部は、すでに明治十一年三月刊の丹羽純一郎訳『英龍動新繁昌記 初篇』に序文を寄せているから、海外の女権運動についての知識等は、丹羽から仕入れたのであろう。ただし、服部にどこまで本気に女権運動を支持する意図があったかには疑問しい点も認められるので、詳細は省略することとする。

次に、

残夢道人（賀古保五郎）著『改編梅花薫』（明二〇・一二）

も、自由新聞社社長が二美人に語ることばだけを記しておく。

令嬢貴下必らず心を勞し給ひぞ余は誓つて彰氏の爲めに尽力すべし抑も東洋の陋習として男を尊び女を卑しめ婦女子にして少しく活潑の品行あれば牝鶏の晨するは家の災なりなどゝ正理に背きし圧制を加へ其極遂に女子の教育を忽せにし女子は男児の奴隸となすに至り女子の社会に有ゆる領分は極めて狹隘なる一少部分に限れしも鎖国の禁一たび弛み交通の路啓けしより男女同権の説を輸入し来り女子の領分は漸く將さに拡張せられんとす然るに東洋の婦人は久しく苛酷なる圧制を受け習慣即ち第二の天性となり自ら奮ふて陋習を洗滌せざるは余の常に遺憾とする所なり今幸ひに令嬢の如き有為活潑の二婦人を得て差人意を強ふせり貴下宜しく后進の領袖となり、旗幟を社会の中央に建て娘子軍の名誉を博せらるべし。

同書は、中江兆民が題字を書いているだけあって、かなり烈しい調子が全編を覆っている。文中の圈点は、引用者の付したもののだが、この点だけを取り上げても、十分アジテーションとしての効果はあるう。なお、同書の一〇六頁から七頁にかけては伏字が

見られる。これも同書の本質を物語っているといえよう。

最後に、

内邸秋風道人（内村義城）著『政治廿三年夢幻之夢全』（明二〇・八）

を挙げておく。これには、お民のことばとして、

兒わがこは是から専はらと根拠の有る政治学を修めまして爾して夫から同志の婦人達と与に遍く国中の婦女子を提醒して其蜚屈へいくつして居る政治思想を發揚させまして爾して其秀逸なる者を撰り抜て秩序紀律の完全したる女政党を組織します爾して此女党を以て彼の男党の人儼げん遂に優柔にして其力国事を負担するに不足なるを認むるときは直ちに之に代りて国会に立ち天適目覚しき活劇を演じて見るの考で御坐います偕兒きわくしが何故に斯の如くの考へを起したかと尋ねますのに這は是迄男子党の精神氣力が余りと申せば薄弱にて国事の務に不深切で有るからで御座あます

云々とあり、単に女性にも男性と同等の権利を与えよという主張から一步進め、女性だけの政党を組織して、国会の場で活躍しようというのだから、もっとも革新的？な見解といえよう。その裏には、すでに婦人参政権は当然のことであるという気概がうかがえるし、その背後には、既成の政党の腐敗墮落に対する烈しい憤りが存在する。女性解放の究極目的の達成のためには、さまざまな社会条件がととのわなければならないが、その一つに、女性だけの政党が結成され、それが一大勢力となる必要があるのだといえよう。しかし、残念なことに、本書においては、この箇所でお

民のことばとして触れられているだけで、女子党の具体的な活躍は描かれていない。あるいは統篇の『鶯宿梅』にそれが活写されているのかも知れないが、この方は入手できていないため、それについては記すことができず、ここで筆を止めるのはかたし。

以上で(一)に分類した作品の概略を終り、次に、

二、婦人解放運動の挫折を扱った作品  
を見ることにしよう。私の知る限りでは、それは、先程からしばしば登場した中島湘煙女史の小説

「山間の名花」(『都の花』明二・二(二・五、五回分載)

ただ一編である。同書は、「一回 銀獨照し出す幾桃李」とあって、「歌台の暖響は春光融々、舞殿の冷袖は風雨凄々」とは、阿房宮の賦に見えたりしが、是は花のかおりの寛美館とは其名世に著るしく、花の如き佳人舒々として歩めば……」という文に始まる。すでに過去の栄華を回想する情が露わである。その荒筋を記せば――

鳥巢保は、立身出世主義者で、墮落した役人である。彼の家を訪問した書生の物部は、辞職を勧告するが、口論となり、かねて鳥巢と知合いの警部に拘引されてしまう。一方、野党の政治家高園幹一の妻芳子は、往年の婦人運動の闘士だが、夫が政府の墮落を怒り、その浄化のため全国遊説を企てるのを激励し、りっぱに留守をまもる。ある日、かつての女弟子四人が訪れ、昔を思い出し、「昔こそへ大層評判したがあの芳子が今日の有様を見よ、己れさへ面白ければ他人の事へどうでもいふと言ねばかりぢや。流石婦人だけあって瓢々として抛るべき地なきときは己むことは

なく国事に奔走すれど三間の茅屋でも巢を構へてはもう夫切りだ」などという世間の陰口を語って涙ぐむ。芳子は、「広い世の

なかには非凡の婦女子もあらうけれどそれは取り除くとしてまづ一般の婦人が教育の空気を呼吸して己れより地位を進歩させるのでなけりや到底むづかしい。十年や廿年に望み通りになる訳にもゆかない。漸次に進むより仕方がない」と諦めたのよ、けれども旧志を棄て安楽のみを偷むといふ訳でもない。たゞ口にはいはいないと挙動に呈はさないとこの違いこそあれ、矢張昔の芳子よ、そして皆どんなことするつもり、」と答え、かつ問い、若い弟子たちが新たに婦人解放運動を始めようとするのを激励する。さらに「粗暴過劇の荒男を学びて識者の嘲りを招かない様に注意して下さい」と戒める。弟子たちの帰ったあと、芳子は「社会の公益を謀るにもおとなしき挙動を以て目立ぬ様に幸福を種附けて奥優かしき結果を得ればいいが」と考える。冒頭の書生物部は、これを知り、「男尊女卑の弊が已まなくつてハとか女権が振はなくつてハとかやかましく喋々したつて役にハ立やしない。皆の婦人が此妻君の様に深らかな愛と高き考へとを以て居れば……男子が輕蔑しやうと思つたつて脳ずぬが尊敬せよと命じるから仕方がないわね」と評するところで、この小説は未完に終つてゐる。

ここには、『女学雑誌』に掲載された同女史の論文に見られるのと類似の、女権から女学への後退が明白である。明治十九年十二月、東京婦人矯風会が設立され、社会的にもその傾向に拍車がかけられていた。その他、東京では、「小石川婦人談話会」や、慈善のための「婦女共和国」、高知では、「婦人交際会」、山形で



は、「しをりの友垣」、大阪では、「大阪婦人授業会」、仙台では、「婦人政慈会」、広島では、「広島婦人協会」などが次々に設立された。ちなみに、明治二十年八月六日付『朝野新聞』に、東京婦人矯風会から寄送された「勧告文」が掲載されているので、抄記しておこう。

明治十九年の十二月始めて東京婦人矯風会を設けてより茲に一歳をも経ざれど、会員は既に一百八十名を越へ、此間に成したる事業も亦尠からず。……中略……蓋は茲に申すこと恐あるに似たれど、今ま我国には上に英聖の皇帝まし／＼、淑徳の御聞え高き皇后の宮内に補佐まし／＼で、維新の政あまた行はせ玉ふが中に、民に自由を得させ人に平等の権を与て、男女ともどもに其おはん恵に沐浴せしめ玉ふぞ、古の明君賢主にも嘗て見奉らざる御徳なるべし。然れば古来幾年と云ふ限りなく、男は尊くして、女は卑し、女は只だ男子の方方に召使はれて、其心の儘に取扱はるべきものと定りたる悪習も、此御徳の劔を以て切払はれ、今日の如く吾等女性が優待さるゝの日となりしは、一に皆な上皇帝、皇后両陛下の恩徳と云ふべし……後略……

「男女同権を真に徹底せしむべく／まづ其の地位の向上を謀れと／婦人矯風会女子の自覚を叫ぶ」との見出しのもとに掲げられた同会の「勧告文」とは、実に以上のようなものであった。すなわち、自由民権も男女同権も、すべて天皇、皇后の徳によるものと規定されてしまっているのだ。なるほど、明治天皇は、君主としてはかなりすぐれた資質の持主だったろうし、明治初年の詔勅

その他には、ここに説かれているような側面もいくらか存在したかもしれない。けれども、それは、天皇專制絶対化への道の布石としてとらえることが可能でもあるのだ。上掲文には、婦人解放問題解決のため、本来的に内包されていなければならぬはずの、下から盛り上る民衆のエネルギーを把握しようとする試みのかけらも発見できない。むしろ、それが困難な時代ではあったろうが、次々に設立された「婦人会」の多くは、上から人民共を見下した存在でしかなかった。また同文には、「近く西洋より輸入したる女子改良の風俗中にも、尚ほ反て其悪しきを止め得ざるものあり一言にして之を言はば、当今上は法律の上を初として、風俗、習慣及び内外の交際の上に就き、亦衛生、教育、授産の上に就て、殊に我国女子の為に除き去るべき弊風、悪習甚だ多き事なり。」とある。表面的には、当代における西洋風俗の軽薄な模倣に対する反省と受けとれるが、その背後には、欧米の自由思想に対する拒絶反応が潜んでいるとさえ推測されるほどなのだ。極論すれば、善意の集まりであったことは事実にはせよ、生活に困まらぬ上流婦人のおあそびの会に過ぎなかったといえるのである。いかに官憲側の弾圧が烈しくなったとはいえ、このような天皇制べったりの立場からの運動が、結果的には反動化し、女性、ことに中流以下の婦人に不利な道徳の押しつけに終ることは見えすいていたといえるであろう。同文にいう「世上の罪惡に迷んとする同胞姉妹を導き、後世の女流を真正の道に案内し、真の美德を吾等の一身に養ひ、正当の路を踏んで進むべきの方向に進」むとの、その「正当の路」とは、結局、以上のようなものにはかならなかった。

自由民権運動挫折後の、かかる状況の下で書かれなければならなかったところの女権小説「山間の名花」には、「女子ニ不似合、恰モ男子ノ為スベキ処ナリ」と評された昔日の尖鋭な女流活動家岸田トシの面影はもはやなく、中島信行夫人として、かつての自己のめざましい活躍ぶりをにがい悔恨をこめてふり返っている姿があるばかりだ。しかし、この不出来で、未完の小説の功績は、かかる中流以上の、女性らしい「反省」そのものの当否に存するのではない。作者の意図しなかったであろう効果——すなわち、政治運動に挫折した一個の人間の悲しみがはからずも快刷されている点にある。むろん、作者自身は、それを意識せず、「女学」の立場からの再起をはかり、うるわしい夫婦愛を強調し、内助の功による穩健な運動の進め方に生甲斐を見出そうと努力してはいるのである。けれども、その後の婦人解放運動のたどった苦難の道を知っている今日のわれわれにしてみれば、心を打たれるのは、梗概の項に記した「世間の陰口」や「漸次に進むより仕方がないと諦めたのよ」との芳子のことばに見られる「挫折の悲しみ」にあるのだ。芳子は、自ら進んでそうしたのではなく、社会状況に屈服して、いわば強いられ、穩健な運動に活路を発見したのである。きわめて革新的だった一女流運動家の体験をふまえたこの未熟未完の作品に近代性を見出そうとするなら、この一点をおいて、ほかにはあるまい。政府の巧妙な弾圧によって生じたいわゆる知識人の自慰的なずるずるべったりの女権から女学への内面的向上？などに、たとえ、そこにキリスト教からの影響があるうとも、私には、なんの意義も見出せない。神の前では、教養高き貴婦人

も無学な娼婦ともに平等なはずではないのか。

「女学」とは、とどのつまり、南翠が『新粧之佳人』（明二〇・

五。この書も女権小説の一種と考えられないことはない。）で、せっかく「女子ハ第二の造物主なりといへる格言ハ漸次に我が国へ輸入し来りて世に婦女教育の忽せならぬを説く者続々として輩出し数千年來仏教に感化せられ儒教に屈服されて恰も人外の如き取扱ひを被り自らも亦これに甘服なし居たりし柔順なる婦女子も驟然起て権理を恢復せんと図る者なきにしもあらず男子も相救誘して最愛の婦に对等の権利を与へんとぞ努めける」と記しながら、「此の期に及んで今まで習つた希臘語や拉典語や又は詩だの歌だの夫から詰らない情史が何の補足に成るものか……些とハ実用に近い学問をして小児の育方や何かを心得て居たら此んな哀しみはあるまいに……妾しも此の御時節に生れて来たものですから何か実用の学問を致したいと心懸けて居ります……」と結論づける女性解放運動の墮落へとつながっていく危険を孕んでいたのだ。それはまた、大阪事件に連座した景山英が福田英子となり、女子に実地に役立つ裁縫その他を教育しようという功利的な実学思想にもつらなるものである。もともと福田の場合には、自らの置かれたきびしい実生活の結果、なんとしても女子に独立して生きる経済的基盤をまず与えねばならぬという烈しい理想があったのだから、いちがいに否定はできないけれども。ただ、それが良妻賢母教育に直結する危険を常に有していたことは否定できない。岸田や景山の挫折は、歴史の必然であろう。歴史は、直線的には進まず、必ずジグザグなコースをたどる。とするなら、「山

間の名花」にも、歴史的必然が働いていたにちがいないのである。

### 三、婦人参政問題が全編を貫いている作品

としては、

南柯亭夢筆（杉山藤次郎）著『女権 美談 文明之花』（明二〇・九）がある。同書の自序の一節にいう。

然ルニ去テ女子ノ政況ヲ顧ミルニ全ク根底ヨリ政治場外ニ放棄去ラレタルモノ、如シ各国政府及ビ其国一般男子ノ口実論拠ヲ聞クニ女子ハ其智識幼稚ナルガ故ニ姑ク其智識開発ノ時ヲ待テ参政権ヲ与ヘント云フニ非ラズシテ女子ノ知識ハ天性男子ニ劣リタルヲ以テ優勝劣敗到底之レニ参政権ヲ与フ可ラズト云フニ在リテ始メヨリシテ全ク政治場外ニ放棄シ去リシモノナリ畢竟女子ハ一種ノ器械視シテ敢テ人類視セザルモノ、如シ嗚呼男子ノ偏頗不公平ノ甚ダシキ何ゾソ夫レ一ニ茲ニ至ルヤ抑モ女子ノ智識男子ニ劣ルモノハ畢竟其教育習慣ノ然ラシムル所敢テ天性ヨリ異ナルニ非ラズ好シヤ天性多少異ナル所アリトスルモ之レガ為メ参政権ヲ与フ可ラズト云フコト能ハザル所以ハ余輩ガ本編ニ縷々論述スルガ如ク然リ……中略……既ニ男子共ニ人類ナレバ男女同ジク政権ニ参与ス可キヲ素ヨリ先天ヨリ定マレル条規ニシテ男子妄ニ女子ヲ政治場外ニ放棄スルノ權ナキモノトス是レ余輩ガ一編ノ小説ニ事寄セテ文明之花タル女権ノ美談ヲ編述スル所以ナリ……後略……文中の圈点は引用者が附したもののだが、当時にあつては、堂々たる正論であつたといえよう。以上によつて、本書の目的は、き

わめて明らかなのだが、念の為に梗概を記すと――

男女同権論者弥生春三郎の演説を聞いた桜木花は、ひそかに春三郎を恋ひ慕う。その後、花に縁談がおこり、しぶしぶそれに従い見合いをするが、意外にもその相手は春三郎だつた。二人はむろん結婚し、桜木ノ花モ弥生ノ春三月ニ遇フテ初メテ花咲キ開クノ時ニゾ会シケル其花ノ咲キ開クト云フハ他ダシ花ニ非ズ即チ文明ノ花タル女権ノ伸暢シツ開クヲコソ云フナレ」ということになる。春三郎は財産家の花と協力して男女同権を主張する新聞を発行し、やがて大阪府の代議士として国会に登壇する。間もなく婦人参政案が国会に提出され、否決される。ところが同案に反対した代議士たちは、帰宅後、女房族にいじめられ、再度、同案が提出されるが、いったん否決される。しかし、採決の方法に疑問を抱いた春三郎の発言により、採決がやり直され、女性に被選挙権は与えないが、選挙権は与えることになった。これが世界各国に波及する。この幸運に桜木夫婦が夢ではないかとわが身をつねると、それは夢筆子の想い寝の夢にすぎなかつた。かくてこの物語は、「本書ハ一編ノ夢物語ナリト雖下モ読者ハ決シテ之ヲ夢ナ忽セニ為セゾ」と結ばれる。

荒筋に明白なように、本書は、当時の政治小説の体裁をすべて整えているといつてよい。すなわち、未来記（夢物語）のかたちをとっていること、主人公の姓名が寓意的であること、議論がその大半を占めていること等々である。また、作品中の「光陰電、信ノ如ク」などということわざのモジリも、当時の世相をうかがわせるに足る。むろん、作者も「自序」において、自分の得意は

「兵事小説」にあつて、「人情小説ノ如キハ至極ノ不得手ナル所ナレバ往々人情ヲ寫シ得ザル所アリ」と断つてゐるように、小説として、當時の作品としても生硬の感はまだぬがれない。すでに『女学雑誌』（明二〇・一）が「之を小説として見れば真に淡白なり」と評している所以である。しかし、私が読み得た女権小説の中では、「男女同権ニシテ夫婦同権ニ非ズ」という主張を除けば、もっとも明確に、かつ、積極的に婦人参政権を主張した作品であつた。つまり、女権小説としては、もっとも熱心、かつ、進歩的な存在なのであり、その意味においては、高く評価できよう。

作者が真面目に女権問題に取り組んでいることは疑いない。けれども本書には、おのずから別の側面もうかがわれるのだ。たとえば、「嗟々我が新日本平民ノ運動ハ海外ニ未ダ曾テアラザル所ノ参政権ヲ婦人ニ与ヘント欲スルニ至ルコト如何ニモ意外ノ事ニシテ外人ノ胆ヲ消奪スルニ足ルモノアリ」とか、「嗚呼先進ノ欧米諸邦未ダ嘗テ女子ニ政権ヲ与ヘザルモノヲ後進ノ日本女子ニ政権ヲ与フルコトアラバ其功全ク其方夫婦ノ力ニシテ亦愉快ナラズヤ」とかいふ箇所がそれだ。もともと日本における婦人参政の運動は、世界的に見れば、後進国日本が、おくれはせながら世界的同時性を有した点にその功績を求めなければならぬ。ところが本書では、世界の婦人参政権獲得に、現実に行先しようという烈しい意気込みが感じられる。本書の主張の性急である所以は、そこに存する。ちなみに、本書の刊行は明治二十年（一八八七）であるが、実際に婦人参政権が獲得できたのは、もっとも早いニュージーランドでさえ、それから六年のちの一八九三年である。以下、オ

ーストラリア（一九〇二）、フィンランド（一九〇六）、ノルウェー（一九一三）、デンマーク（一九一七）、イギリス（一九一八）、ドイツ（一九一九）、アメリカ（一九二〇）と、いずれも二十世紀に入ってからのことだ。

これを要するに、『文明之花』における婦人参政権獲得の運動には、世界の運動に先駆けることによって、全世界、とくに欧米先進諸国に日本文明の実力を示そうとする側面があつたのだ。もともと自由民権運動の落し子とでもいうべき女権論議は、ここに至つて国威発揚と結合したのである。すなわち、民権から国権への移行が婦人解放運動にも見られるのである。否、すでに指摘されていることだが、民権の意識の中に、早くも国権の意識が内包されていた例証の一つになるかもしれない。しかし、日本国自体としては、もっと焦眉の急を要する問題があつた。同書中に、

「彼レ英、仏、蘭、魯ガ我邦ニ対シ未ダ充分ナル条約改正ヲ肯セザルモノハ陰ニ己レ等ノ利己主義ヲ持スルニ在リト雖ドモ其陽ニ口実トスル所ハ未ダ日本ニ自由政治ノ標証ヲ充分ニ示サザルニ在リ然ラバ彼レ未ダ嘗テ与ヘザル女子ノ政権ヲ我國ニ於テ与フレバ其事意表ニ出デ彼等ヲシテ胆ヲ消シ驚愕ヲ喫セシムルニ足りイテ彼レガ口実ヲ蠶粉ニ撃破シテ全ク対等ノ条約ヲ結ブコトヲ得シカ若シ之ヲ得バ其功モ亦其方等夫婦ノ力ニ基クト云ハマクノミ」とあるのがそれだ。安政年間に結ばれた不平等条約改正（関税自主権の回復と領事裁判権の廃止）は、維新後官民一致しての切望であつた。とくに、明治十九年十月、紀州沖で英船が沈没、西洋人乗客は、船長とともにボートで逃れ、日本人船客二十三名が全員置

き去りにされて死亡、イギリス領事による海事審判で、船長以下無罪となつたといわゆるノルマントン号事件は、国民を激昂させ、政府に条約改正を迫る声は、ひととき高くなつた。『文明之花』が刊行されたのは、その翌年のことである。「兵事小説」が得意だと自称する筆者が、この事件を見逃すはずはない。遠い先の夢物語であつたはずの婦人参政論議が、しかし、身近かな条約改正問題に結びつけられたことは、一方で民権から国権への危険を孕みながらも、さまざまな階層の読者に対し、強い説得力を持ちえたといえるであらう。つまり、婦人解放運動の日本における啓蒙書として、『文明之花』は、高い評価を与えられてよい作品だったのである。

それにしても、このようなかたち、すなわち婦人参政問題を条約改正に結びつけるかたちで扱わなければならないこと自体に、同書の有するもう一面が露呈されているという見方も可能なのである。日本は、一方で自国の不平等条約改正の運動を進めながら、一方で朝鮮に領事裁判権を有することに疑問を抱かなかつた。外交面での情報に不足していた自由党は、朝鮮問題に関する限り、政府よりも過激な侵略主義を公然主張して憚らなかつたのである。世界全体が帝国主義の時代であつたから、わが身を守るためにはやむをえなかつたにせよ、自由民権運動全体をむやみに神聖視することは、現代のわれわれには許されない。むしろ、今日では、自由党の外交面での功罪には、史家によつて公平な評価が与えられている。とするなら、『文明之花』に象徴される女権小説そのものに、一種のよろさを見ることが、あながち不当な

見解とはいえない。つまり、自由民権運動の敗北と同時に、政治小説が社会の表面から姿を消してしまつたそのもろさと同質のものが、その一ジャンルである女権小説にもあつたのだと考えられる。否、そのもろさは、母胎である自由民権運動そのものに内包されていたのだと私は思っている。今日、女権小説といえど、柳浪の糊口の資として制作された、多分に戯作的側面の認められる『女子屢中楼』くらいしか、——それが何度も復刻されたが故に——多くの人々の念頭に浮かばないのも、そう考えれば、むしろ、当然の帰結であると思われる。所詮、明治二十年前後に狂い咲いた徒花に過ぎなかつたのが、この小説群の運命であつたのだから。ただ、その徒花を読み返し、その屍を踏み越えることは、今後の婦人解放運動にとって、まったく無意味であるとは思えないのである。

#### 「国文学研究」投稿規定

- 一、投稿論文は原則として、四〇〇字詰原稿用紙三〇枚以内とし、べつに四〇〇字程度の要旨を添えること。
  - 一、投稿論文には、住所・卒業年度・職業を明記すること。
  - 一、投稿締切り日は、二月一日・六月一日・一〇月一日とするが、随時投稿されたい。
  - 一、採否に関しては編集部に一任されたい。
  - 一、校正は初校のみを執筆者にまわし、以後は編集部が行なう。
- \* 一人でも多くの方の論文をのせられるよう、枚数があまり多くならないようお願い致します。